

高知県の淡水魚類

【現 状】

日本の川や湖、池や沼から記録されている魚類は 350~400 種ほどで、通常これらが「淡水魚」と呼ばれていますが、その定義は厳密なものではなく、これらの中には一時的に川に入ってきた海水魚も多く含まれています。一般に、淡水魚はその生活サイクルから以下の三つのカテゴリーに分類されます。

- 純淡水魚：一生を川や湖などの淡水域だけで過ごす魚
- 通し回遊魚とおしかいゆうぎょ：川と海を周期的に行き来しながら生活する魚
- 周縁性淡水魚しゅうえんせいたんすいぎょ：河口周辺の汽水域（淡水と海水が入り交じる場所）で生活する魚と、ふだんは海で生活しますが、一時的に淡水域に入ってくる魚

純淡水魚にはコイやナマズ、ドジョウやメダカなどの身近な魚が多く含まれます。通し回遊魚にはウナギやアユ、サケなどが含まれます。周縁性淡水魚にはスズキ、クロダイ、クサフグなどが含まれます。

高知県の川や池からは約 220 種の淡水魚が記録されています。このうちの約 20%にあたる 46 種が純淡水魚、約 18%にあたる 40 種が通し回遊魚、残りの 60%以上が周縁性淡水魚です。土佐湾に面し、全国有数の海水魚の種数を誇る高知県では、河口周辺でくらす周縁性淡水魚の種類が多いのが特徴です。また、琉球列島以南の暖かい地域にくらすたくさんの種類の通し回遊魚や周縁性淡水魚の稚魚が黒潮によって運ばれてくるのも特徴です。一方、比較的種類の少ない純淡水魚ですが、新莊川から奈半利川にかけての高知県にしか生息しないシマドジョウ高知集団、2006 年に四万十川水系から新種記載きんしゅされ、高知県西部と愛媛県にしか生息していないヒナイシドジョウ（写真 1）などの貴重種も見られます。通し回遊魚ではアユ、ウナギが特に有名ですが、ヨシノボリ類やゴクラクハゼ、ヌマチチブといった、県下で一般に「ゴリ」と呼ばれるハゼの仲間も多く見られます。



写真 1. ヒナイシドジョウ

【変 化】

【移植による種類の増加】

高知県に元々分布していたと考えられる純淡水魚は 22 種ですが、現在では移植により 46 種が県下の川や池から記録されています。これらの中には「特定外来生物」に指定されているオオクチバス、ブルーギル、カダヤシなどの、いわゆる「外来魚」（「国外移入種」とも呼ばれます）が約半数含まれますが、残りの半数はムギツク、スゴモロコ、イチモンジタナゴなどに代表される、国内の他所から持ち込まれた「国内移入種」です。同じ県内でも、元々吉野川流域でしか見

られなかったオイカワ、カマツカが、現在では移植により県下のほぼ全域で見られるようになってきている事例もあります。通し回遊魚では、ウキゴリ、トウヨシノボリなど7種が移植されています。特にトウヨシノボリは繁殖力が強く、1990年以降の20年間で県下の主要河川の大半に分布が広がりました。周縁性淡水魚では中国から養殖用に輸入されたタイリクスズキが逃げだし、各地で捕獲されています。移植による種類の増加は地域本来の生物相に大きな影響を与え、地域固有の貴重な生物の減少にもつながるため、決して喜ばしいことではありません。

【増える南方系の魚種】

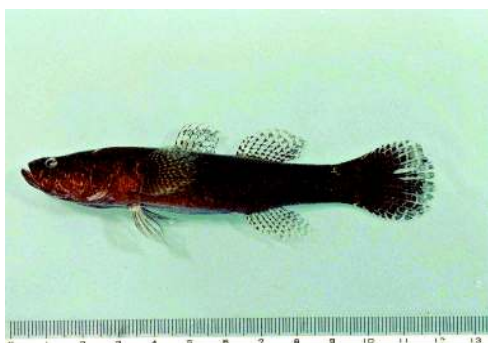


写真2. 高知県の河川で採集されたオカメハゼの成魚

通し回遊魚や周縁性淡水魚の多くは、卵や稚魚を海流にのせて出来るだけ広い範囲に分散させ、生活の場を広げようとします。高知県には琉球列島以南の暖かい地域でくらす魚が毎年黒潮にのって数多く運ばれてきます。多くは冬を越すことが出来ずに死んでしまうため、こうした魚種を「死滅回遊魚」、このような現象を「無効分散」と言います。しかし、最近では冬を越して成長した成魚が見つかる種（オカメハゼ（図2）、ヒトミハゼ、ノボリハゼ、ミナミサルハゼなど）や、既に高知県に定着している可能性が高い種（テングヨウジ、カワヨウジ、

クロホシマンジュウダイなど）も出てきています。また、最近20年間で高知県の河川から記録された魚種は飛躍的に増えましたが、これには調査が進んだこと以外に、かつては成長して人目に付くようになる前に死んでいた魚種がある程度成長出来るようになり、調査などで確認される機会が増えたことも考えられます。これらの全てが温暖化による影響とは言い切れませんが、県下で確認される南方系の魚種が増えてきていることは確かです。

【人との関わり】

【人間活動により減少する淡水魚】

一方で、高知県に元々すんでいた淡水魚の多くは人間活動の影響により絶滅の危機に瀕しています。2002年に刊行された「高知県版レッドデータブック」には、県下で記録された淡水魚全体の約25%にあたる54種が掲載されています。その一例を紹介します。

小卵型カジカ（写真3）は、かつては県下の主要河川に広く分布していましたが、1969年（昭和44年）の仁淀川を最後に高知県下で確認が途絶え、絶滅したと考えられています。

スナヤツメ南方集団は、本山町と大豊町を中心とした吉野川流域のごく一部に細々と生き残っているに過ぎません。

ヒナイシドジョウは四万十川を中心とした西部に分布し、体の模様からA~Cの3型に分けられますが、C型の生息地はわずか1箇所しか残っていません。

このように、私達人間の生活が便利になっていく陰で、多くの種類の淡水魚が絶滅の危機に瀕していることを忘れてはいけません。



写真3. 高知県では絶滅したと考えられる小卵型カジカ